



多世代対応型の街づくり



株式会社 日本経済研究所

調査本部 医療福祉部

研究員 前田 聡 紀

1. はじめに

メディアなどを通じて「コンパクトシティ」という言葉を目にするようになって久しい。コンパクトシティという言葉は、元来、経済成長とともに道路や公共施設などのハード面の整備が進み、市街地が拡散したことで、中心市街地が空洞化した弊害を防ごうとする構想の中で生まれた。ところが、このところ使われている「コンパクトシティ」は、当初の意味合いから少し変容してきたように思う。それは、地域交流や介護サービス、子育て支援サービスなどのソフト面の要素が加わるようになってきているという点である。

核家族化が進み、子を持つ親は、地域に暮らす子どもたちを地域であたたかく見守ってくれるような街に暮らしたい、一方で日常生活における不安を多く抱えている独居や老々介護の高齢者は、地域のコミュニティに参加したいなど、世代により地域に求めるニーズは多様化してきている。こうした多様なニーズが背景となって、街づくりには生活に必要な拠点や機能だけではなく、社会とのつながりや交流が求められるようになってきている。

そこで本稿では、生活拠点の整備だけでなく交流をも取り込んだ「多世代対応型の街づくり」の事例を紹介する。

2. ぐるんとびー駒寄

「ぐるんとびー駒寄」は、株式会社ぐるんとびー

が経営する、日本で初めてUR都市機構の団地の空き室を利用した小規模多機能型居宅介護施設である。小規模多機能型居宅介護施設とは、高齢者を居宅又は厚生労働省令で定めるサービスの拠点に通わ



出典：ぐるんとびー駒寄HP

せ、又は短期間宿泊させ、当該拠点において入浴、排せつ、食事などの介護、その他の日常生活上の世話及び機能訓練を行う施設である。

ぐるんとびーのコンセプトは「高齢者が自分らしく輝き、次世代の子どもたちにその経験を引き継いでいく、そのような循環型地域社会の拠点づくり」であり、団地を活用し、高齢者だけでなく、入居者や学校帰りの子どもたちも受け入れている点が一般の小規模多機能型介護施設とは異なる。団地を一つの大きな家族ととらえ、多世代の交流や相互の学びの場としての機能を提供しているのである。

さらに特筆すべきは、ぐるんとびーの代表である菅原健介氏がこの団地に移住し、6階は施設、5階が代表の自宅、4階に代表の義母、3階と5

階と8階は社員寮としている点である。これまで9名の利用者が引っ越してきたほか、今年には福岡から1名、東京から2名の看護師や理学療法士の引っ越しが決まっているとのことであり、住民も着々と増えている。利用者も働き手も移住してくる新たな団地づくりの手法といえよう。

■施設利用基本料金

	介護保険 自己負担額		介護保険 自己負担額
要支援1	3,628円	要介護3	23,518円
要支援2	7,331円	要介護4	25,958円
要介護1	11,002円	要介護5	28,621円
要介護2	16,168円		

※通い、訪問、宿泊、介護費用分のすべてを含んだ1ヶ月単位の包括費用（定額）

※上記の施設利用基本料金は介護保険給付費額を除いた自己負担額となる。

※施設利用基本料金の他に食費や宿泊費、物品費など実費で掛かる費用もある。

出典：ぐるんとび一駒寄HP

3. 学研ココファンの複合型サービス付き高齢者向け住宅（ココファン柏豊四季台）

近年、介護需要が高まっている中で、高齢者を対象としたサービス付き高齢者向け住宅（以下サ高住）が増えてきている。サ高住とは、「安否確認」と「生活相談」を必須としたバリアフリーの高齢者専用の賃貸住宅で、多くは食事サービスや介護サービスなどを受けることも可能な施設である。

学研の提供するサ高住は、一般的な施設とは一味違う。それは、理想とする地域包括ケアを「0歳から100歳を超える高齢者までの全ての世帯の

人が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができる社会」と考え、住まいや介護だけでなく、医療や生活支援サービス、子育て支援の一体的な提供を行っている点である。

例えば「ココファン柏豊四季台」では、住まい（サ高住、グループホーム）、介護（居宅介護支援、訪問介護、定期巡回・随時対応型訪問介護看護、小規模多機能型居宅介護、生活支援サービス）、医療（診療所、在宅療養支援診療所、薬局、訪問看護）、子育て支援（小規模認可保育所、学童保育）などのサービスが提供されている。一般的なサ高住と比較すると、診療所や薬局、保育所などの施設が併設されており、子育て世帯から医療を必要とする高齢者までがより安心して生活することが可能となっている。

こうした複合型サ高住は他のエリアにも建設されており、「ココファン勝どき」においては、タワーマンションの1～4階部分にサ高住と小規模多機能型居宅介護のサービスが提供されている。学研ココファンの複合型サ高住は、子どもから高齢者までが暮らせる街づくりを支えており、まさにコンパクトシティの一形態といえよう。

4. まとめ

これからのコンパクトシティのキーワードは多世代対応型の街づくりであり、上記に取り上げたような施設や拠点づくりは今後も広がっていくのではないかと。その街に暮らす子どもから高齢者が互いに支え合い、笑顔に溢れた暮らしができる街づくりを期待したい。



出典：学研ココファンHP